

# 1596年豊後地震で消失した勢家沖ノ浜の位置

郷土史研究家\* 日名子 健二

## Location of Seike-Okinohama Which Disappeared Due to the 1596 Bungo Earthquake

Kenji HINAGO

Local History Researcher, 843-1 Seike, Oita, 870-0012 Japan

This paper determines the location of Seike-Okinohama which disappeared due to the 1596 Bungo Earthquake. It is mentioned in the Jesuits Annual Report of Japan that Seike-Okinohama was located more than 0.5 and less than 1 legua away from the Christian facility in Funai, Bungo's provincial capital. Although the definition of the length of 1 legua differs by region and era, it is reasonable to consider 1 legua as 4.4 km in this Jesuits report. Therefore, Seike-Okinohama should have been located more than 2.2 km and less than 4.4 km away from Funai. Furthermore, from a topographical consideration, it is thought that the northern shoreline of Seike-Okinohama used to be located around the shoreline at low tide (i.e., water depth 0 m line) in Taisho era. The route from Funai to Seike-Okinohama at that time was also inferred on the map. As a result, it was found that Seike-Okinohama used to be located about 3 km away from Funai. Seike-Okinohama was once submerged in the sea, but a part of it has been reclaimed from the sea.

Keywords: 1596 Bungo earthquake, Seike-Okinohama, legua.

### § 1. はじめに

文禄五年(1596)豊後地震は、由布院での山崩れや別府湾沿岸の津波被害などで知られる地震である。筆者らは『歴史地震』第29～33号において、別府湾沿岸の津波高や津波の襲来日時等について見解を述べてきた。このうち松崎・他(2017)においては、16世紀後半、布教のために長期に亘って日本に居住していたイエズス会宣教師ルイス・フロイスが記述した、豊後の中心地府内の外港沖ノ浜における7ブラサという津波高が約7mであることを論じた。本稿はこの続編で、7ブラサという津波高が記録された沖ノ浜の位置の比定を試みるものである。

沖ノ浜は、豊後地震の際に海に沈んだという沈島伝説で有名な瓜生島であると岡本(1956)によって比定され、さらに加藤(1991)は豊後地震による液状化や津波等によって崩壊し消失したと指摘した。その沖ノ浜(瓜生島)の位置については、史料調査や海底調査等に基づいた研究が数多くなされ、『大分市史下』[大分市史編さん委員会(1988)](以下、『大分市史下』(1988)と記す)に代表されるように、概ね大分市西部の5号埋立地や春日浦埋立地周辺と推定されている(図1)ものの、正確な位置特定は行われていない。その理由としては、史料検証が厳密に行われていないことに加えて、§4で詳述するが、沖ノ浜の定義が定かでない(複数の沖ノ浜が存在する)こ

とも一因であろうと考える。そこで本稿は、まず既往の研究とその問題点について整理したうえで、同時代史料の距離表記に着目し、さらに大正期の海図を用いた海底地形に関する考察及び現地踏査に基づいて、位置の比定を行った。

### § 2. 沖ノ浜と瓜生島

沖ノ浜が文献史料に初出するのは、鄭舜功の『日本一鑑』である。明国の使者鄭舜功は室町幕府に倭寇の取り締まり強化を要請するため広東から日本に船で向かい、1556年夏、沖ノ浜(澳浜)に航行の自由を失うような体で漂着した。鄭舜功は府内や臼杵に滞在すること半年、その後明国に帰国し『日本一鑑』を著した[神戸(2000)]。

[史料1] 『日本一鑑』(1570年前後の成立)

道廣飄飄 入澳浜策馬往 見豊後君

【書き下し文】廣(広東)より道をとるに、飄飄て澳浜に入る。馬を策し往きて、豊後の君(大友義鎮)に見ゆ。

海曲之中 次日澳浜(烏気法邁) 澳浅膠舟 不堪繫泊 陸行府内凡五六里 皆為曲道

【書き下し文】海曲の中、澳浜(烏気法邁)と曰う

\* 〒870-0012 大分県大分市大字勢家 843 番地の 1  
電子メール: ebisu@vmail.plala.or.jp

に次る。澳浅く舟膠く、繫泊に堪えず。府内に陸行するに凡そ五・六里。皆曲道を為す。

これ以降、沖ノ浜に関する記述は、大友史料や中川史料など、多くの史料で確認できる。さらには、イエズス会宣教師の報告にも数多く登場する(史料 2)。

[史料 2] 『1596 年日本年報補遺』(1596)

Esta hũ lugar maritimo perto de hũa legoa de Funai escala, e porto de muitas embarcaçoẽs que Era hua grande villa por nome Oqinofama, donde este bom homem se chama Bras de Oqinofama muito conhecido Em Bungo per sua casa ser hospedaria de muita gente de diversas partes. (注:原文は 16 世紀のポルトガル語で, hua は huma の略)

【日本語訳】さて、フナイからおよそ 1 レグア、とある海沿いの町があって、多くの船舶の停泊地、そして港であり、オキノファマという名の大きな町であったが、そこからこの良い男はブラス・デ・オキノファマと呼ばれていて、自らの家がいろんな地方からの多くの人々の宿泊先であったためブンゴではよく知られていた。(注:この後に、津波が「集落の上に 7 プラサ以上も立ち上った」との記述がある)

しかしながら江戸期に入ると、沖ノ浜が文献史料に登場する数は減り、1698 年には『豊府聞書』に瓜生島が初出する。史料 3 によると、瓜生島は沖浜町とも呼ばれていたと云う。

[史料 3] 『豊府聞書』(1698)

府城之西北二十余町勢家(古ハ世家也) 邑其地高…(略)… 勢家名境内 有禅寺之旧跡 名法蔵寺 不知開基 境地高故不至鉅浪 勢家村二十余町北有邑名瓜生島 或云沖浜町 其町縦于東西竝于南北三筋成町 所謂南本町 中裏町 北新町

さらに江戸時代後期になると、瓜生島を落とし込んだ地図(「瓜生島古図」と言い『豊陽古事談』(1857)に添付されたもの等)も生まれた。これらの史料に基づいて、沖ノ浜あるいは瓜生島の位置推定が多くなされている。§ 3 ではそれら既往研究を整理する。

### § 3. 沖ノ浜(瓜生島)位置に関する既往研究と所見

#### 3.1 大森の説

大森(1916)は、「現時ノ菡萏小島ハ或ハ瓜生島ニ属セシナランカ」と、西大分港西部にある菡萏小島(笠結島)[図 1]が瓜生島の一部ではないかと推察している。ただし、沖ノ浜についての言及はない。

また瓜生島陥没について、「陥没トハ誇張ニ過ギタリ。元来築堤ノ類ガ強キ振動ノ為メニ落チ付ク結果、十余尺モ低下スルハ稀ナラザル所ナルガ、瓜生島ノ中ニテモ土地柔弱ナル市街地浜辺等ハ数尺ノ低下ヲ受ケ水ニ覆ハルルニ至リシモ岩石地及ビ堅硬ナル台地ハ当時ノ水上ニ存セシナラン」と述べている。

しかし、大森の説は地形的な考察により、菡萏小島が瓜生島の一部ではないかと推察したものであり、位置特定という観点では信頼性が高いとは言い難い。

#### 3.2 今村の説

今村(1946)は、大森(1916)とは異なり、瓜生島を含む地域が陥没したという考えに立つとともに、瓜生島を記した地図を示し、「第一図は、幸松謙治家旧蔵の古図に拠り、瓜生島と久光島とを陸地測量部図の上に復活せしめたものである。」と述べ、瓜生島の位置を「大分市の北方、別府市の東方海上」と推察している。そして、「幸松家古図」に倣って、沖ノ浜を瓜生島の南岸に落とし込んでいる。

しかし、「幸松家古図」は「瓜生島古図」の一つであり、『豊府聞書』等をベースとした想像図と考えられるため、“第一図”の信頼性は低い。

#### 3.3 岡本の説

岡本(1956)は、「船の碇泊地即ち港は比較的に府内の町に近くして、堂尻川(今の太田川)の川口から遠からぬところ」と述べている。船の着く沖ノ浜を河口周辺と考えているのであろう。そして、「鄭舜功が陸行 5・6 里の間を騎馬して沖浜から府内へ赴いたとその経験を語ったのは陸続きであったことの証言と見做すべきである」と述べている。また府内と沖ノ浜間の距離については、イエズス会宣教師の報告に触れ、「ルイス・フロイスは 1559 年のガスパール・ヴィレラの乗船のときにはイタリア里程で半哩と述べ、1564 年に彼自身が上京する際の記事では 1 哩というた。それより 33 年後の 1596 年(慶長元年)に沖浜が大地震で海中に陥没したことを報じた書簡では 3 哩と書いた。同一人でさえ、時によってこのようにまちまちのことを記してい

る。」と指摘しているが、最終的には、鄭舜功の記録などを勘案し2哩程度と推定している。

加藤(1997)によれば、沖ノ浜と瓜生島を結び付けて考察する事を試みた最初の学術論文である。府内から沖ノ浜までの距離について、フロイスの記述が時によって揺れているとの指摘は、邦訳等に起因する岡本の誤解であるが、5.1.3で詳述する。

### 3.4 「瓜生島」調査会の説

「瓜生島」調査会の代表・加藤知弘(当時大分大学教授)は、主として『日本一鑑』やイエズス会史料を根拠に、府内から沖ノ浜までの距離を「3.5 km から 4 km ぐらいではなかったか」という見当を立て、「旧府内の中心と思われる東元町付近にコンパスの軸を据えて、3.5 km から 4 km の縮尺の半円を回転させると、東は萩原・今津留沖、西はかんたん沖(図 1)まで広範囲な海面がその圏内に含まれてくる」と述べている[加藤(1978)]. さらに加藤(1997)では、方角を「府内の西」とし、『日本一鑑』の記述:「およそ 5, 6 里(中国里, 1 里は約 600 m)」に重きを置き、「府内との距離は 3 ~ 3.5 km」と推定している。そして「瓜生島」調査会は、沖ノ浜の推定位置を春日浦埋立地(図 2 の西日本電線と記されているところ。昭和十年代と三十年代の 2 期に亘って埋立)や豊海埋立地(通称 5 号埋立地。昭和四十年代に埋立)の沖合と考えて海底地層探査を実施し[加藤(1978), 図 2], 最終的には図 1[加藤(1991)]のように比定している。

また、瓜生島崩壊の原因について、瓜生島は砂州で結ばれた海岸近くの「島」であり、「海岸の傾斜と津波による地下水の増加が問題で、海岸の一角が水没した」[加藤(1978)]と津波と液状化の影響について言及している。さらに加藤(1991)は、「地震と津波で島の地盤が液状化しはじめる。まず島の輪郭がにじみだし、ついには島全体の地盤が液体と同じような状態になり、海底の斜面に沿ってくずれ落ちた。あとには砂州と島の一部が残るだけだった。だがやがて砂州も島の一部も波に洗われ消えてしまった。」と推定している。

海底地層探査をも行って科学技術的に位置特定を試みた研究であり、瓜生島をはじめて 5 号埋立地周辺と推定したという意味では先駆的である。ただ、沖ノ浜を“島”と認識した点は大きな問題であり、これについては § 4 で述べる。

### 3.5 羽鳥の説

羽鳥(1985)は、「瓜生島」調査会(1977)や加藤(1978)を参照したうえで、「幸松家古図」に基づいて、瓜生島を埋立地沖に図示しているが、沖ノ浜の言及はない。羽鳥の説は「瓜生島古図」に基づいた推定であり、3.2と同様の理由で信頼性は低い。

### 3.6 『大分市史』の説

#### 3.6.1 『大分市史 中』の説

『大分市史 中』[大分市史編さん委員会(1987)](以下、『大分市史 中』(1987)と記す)の中世編第 5 章「義鎮時代の府内(府中)の町」(執筆:狭間久)には、現代測量地図に春日社、新町・裏町・本町、海岸(河岸)線等を落とし込んだ『戦国時代の府内(府中)の町と沖ノ浜復原想定図』(以下、復原想定図と略す)が示されている(一部分を図 3 に示す)。新町・裏町・本町と記した場所の南にカッコ付きの縦書きで(沖ノ浜)と記載しており、この付近を沖ノ浜と比定しているようである。図 3 は、『高山家絵図』や『戦国時代府内絵図』を基に作成されたもので、「沖ノ浜の部分は、2 つの絵図とも陸続きで海に突き出た地形になっており、一部は旧海岸線より海中になると推定される」と述べている。

ここで『高山家絵図』とは、『元府内之図』[原図は永禄九年(1566)に書かれたと云うが現存しない]を、文政十二年(1829)に牧在氏が複写し、これを元大分市長の高山英明氏が昭和十五年(1940)に更に写したものである。そして、「高山氏の複写絵図を現在の二千五百分の一の大分市街地図に重ねてみた。すると大友時代から位置が変わっていないとされる若宮八幡社・大智寺・稲荷社、それに塩九升の南北の道が一致したのである。これにより複写絵図の距離などがある程度正確であることがわかった。」と『大分市史 中』(1987)は述べている(若宮八幡社、大智寺、稲荷社は後掲する図 8 参照。塩九升の南北の道とは図 4 の中町、下町、穴打町を経る道)。

一方、『戦国時代府内絵図』(図 4 にトレースを示す)は、『大分市史 中』(1987)の編纂過程で市内の旧家から発見された。玉永(2003)によれば、「昭和六十年発見、縦 88 cm, 横 130 cm, 右が北」とのことである。

大友時代の府内・沖ノ浜を描いた精緻な絵図はこの 2 つが存在するが、『戦国時代府内絵図』について『大分市史 中』(1987)は、「和紙の古さなどから新しくても江戸中期までに書かれたものと推定」され、「現

存する最古のもの」と述べる。玉永・坂本(2009)も、「天正九年(1581)から十四年(1586)までの府内の様子を、江戸時代になった1635年以降に、記憶と情報をもとに描かれたもの」としている。一方、『高山家絵図』は後世の写しであるが、構図[方位(左右が南北)や寺社などの配置]は、『戦国時代府内絵図』とほとんど同一である。ただ情報量(文字量)は『高山家絵図』の方が豊富であり、沖ノ浜という文字は『戦国時代府内絵図』には描かれていないが、『高山家絵図』で登場する。

ここで、府内中心部(大友館周辺)については、『高山家絵図』や『戦国時代府内絵図』から比定した大友館、万寿寺、ダイウス堂、街路などの場所の発掘調査が行われ、遺物、遺構、遺体が発見されたことや、大友時代から位置が変わっていないとされる若宮八幡社・大智寺・稲荷社、それに塩九升の南北の道が一致したことなどから、復原想定図(図3)の府内中心部はある程度信用できると思われる。

一方、復原想定図に示された沖ノ浜については、豊後地震以降、沖ノ浜が府内の外港として史料に登場しないことから、一般的にはそのほとんどが海没したと認識されている。しかし図3で(沖ノ浜)と指摘された地点は、後掲する図7や図8と対比すればわかるが、中世から現在にかけて陸域のままであったと考えられる。これは、海没したという史実と矛盾する。『大分市史 下』(1988)は、沖ノ浜港は「埋め立てられる前の大分市の海岸からかなり突き出た所に位置していたことが想定される」としている。したがって、図3に記す新町・裏町・本町の南側[つまり住吉川(図4)河口西岸の勢家陸域]を沖ノ浜に比定するのは根拠に乏しく信頼性に欠けると考える。ただし、「一部は旧海岸線より海中になる」と述べているので、新町・裏町・本町の付近も沖ノ浜の一部として考えているようにも解釈できる。史料3で示したように、『豊府聞書』には「沖浜町 其町縦于東西立于南北三筋成町 所謂南本町 中裏町 北新町」という記述があることから、筆者は沖ノ浜とは新町・裏町・本町の付近のことを指すと考える。したがって、図3で新町(三筋の町のうち最も海側)と示されたところであれば、江戸期には海域であり、沖ノ浜があった可能性を否定できないと考える。しかしその場合でも、新町・裏町・本町や蛭子社と記した付近では発掘調査が行われてないことから、その北側に推定している戦国時代の海岸線(太破線)は精度に劣ると考える。

### 3.6.2 『大分市史 下』の説

『大分市史 下』(1988)の海外交流編第4及び5章の執筆者:加藤知弘は、「沖ノ浜は府内の重要な港で、文禄五年(慶長元・1596年)の地震と津波によって海没した。住吉泊地の西部から西日本電線にかけての一帯がその中心と思われる。」と述べている(図1及び図2)。西日本電線は昭和三十年代に埋め立てられた春日浦埋立地に造成された工場であるため、沖ノ浜が旧海域にあったと推定していることになる。本文の中でも「結論的にいうと、沖ノ浜(「瓜生島」)の所在位置は、勢家町の北、旧府内の町から3~3.5 kmの地点(現在海中)と推定される。」と述べており、府内からの距離については加藤(1997)と同じ見解である。

『大分市史 下』(1988)における「現在海中」という推定は、春日浦埋立地と5号埋立地の沖合と推定した加藤(1991)と整合的である。しかし、より具体的な「住吉泊地西部から西日本電線の一帯」との推定は、加藤(1991)の推定よりも若干陸側である(図1)。また、『大分市史』の執筆者の間(狭間久と加藤知弘)でも、沖ノ浜の位置については、見解が微妙に異なっている。すなわち狭間(『大分市史 中』)は加藤(『大分市史 下』)よりもさらに陸側に推定している(図1)。

### 3.7 三澤・他の説

三澤・他(1992)は「瓜生島」調査会よりも広域に海底地層探査(音波探査)を実施し、また沿岸陸域のボーリング調査も実施して、瓜生島の位置特定を試みた調査である。5号埋立地のほぼ全域は、かつて水深1~2 m未満の極浅海であって、その沖側には地すべり地の構造と類似する特徴的な地質現象が認められたとして、「この付近が瓜生島と呼ばれた地域であったと推定される。」と述べている。また、「島そのものが地震にもなつて液状化などによって崩壊し広い海域へ流失した」、「島の痕跡が長年の堆積作用によって埋積されてしまった」と、加藤(1978)の指摘を引用している。三澤・他の説は「瓜生島」調査会の説を支持する研究である。

### 3.8 岡部の説

岡部(2003)は府内から沖ノ浜までの距離が、史料によって一定でないことに関して考察し、「「沖ノ浜」と呼ばれる船の停泊地は、特定された場所(スポット)ではなく、特定されない広範な空間をもつ、海辺地域(ゾーン)を指していたのではないかと指摘。そして、

「具体的には、16世紀頃の沖ノ浜とは、勢家村沖ノ浜を中心に、西は生石から東は今津留に至る、かなり広範囲な海辺地域を意味していた」とし、勢家沖ノ浜、今津留沖ノ浜、生石沖ノ浜の存在を指摘している(生石は図1参照)。また、南蛮船等の大型帆船の停泊地は、遠浅が終わり、急激に深海部分へ落ち込んでいくところとし、今津留から生石にかけての200～1,000m沖合と推定している。

岡部の説は、沖ノ浜という地名の定義について、海辺地域(陸域の船着場とこれに対応する南蛮船停泊エリア)として、今津留から生石までの広義の沖ノ浜(東西約3km)の存在を指摘したものであり、その概念には筆者も同意する。

ここで、今津留沖ノ浜について考察したい。中川氏が大分郡今津留村を拝領した経緯をしてみる。中川氏が豊後岡(竹田市)に入封したのは文禄三年(1594年)二月である。その後、豊臣秀吉より次の御書(朱印状)を頂き、飛び地として今津留村を与えられた。

[史料4] 文禄三年(1594年) 秀吉書状

豊後国大分郡内今鶴村四百六拾弍石五升事  
令執沙汰可運上候 依為舟着御代官被仰付候  
也

文禄三年八月廿五日 朱印(秀吉)  
中川修理大夫とのへ

この朱印状自体に沖ノ浜という言葉は出てこないが、『中川史料集』[北村(1969)]は、朱印状の事書(説明文)に「八月二十五日、今津留村御拝領、同所沖の浜御船着となる」と記している。また『大分市史中』(1987)は、「今津留村は、中川家入部後の文禄三年八月に、秀吉蔵入地のうちを代官として預けられ、その地の沖ノ浜に自己の船着きを設けた。大地震後の慶長二年冬に沖ノ浜から、今津留村本村に船着きを移したと解釈すべき」と述べている。以上から今津留村(本村)の枝村的意味合いを有する沖ノ浜という地に、中川氏によって船着場が設けられていたことは間違いないと考える。さらに決定的な事実として、大分川左岸は早川氏支配であることから、左岸側に中川氏の船着場が存在した可能性は考えられない。したがってこの文書より、大分川の右岸(あるいは中州)に、中川氏の港湾施設である今津留沖ノ浜が存在したことが立証される。

また、岡部(2003)は、生石沖ノ浜が存在した理由として浦上宗鉄書状をあげている。

[史料5] 天正十三年(1585年) 浦上宗鉄書状

猶々両寺之公米、何と候ても沖浜まで運送之儀、  
頼存候 (注:両寺とは大善寺・浄土寺)

岡部(2003)は、この書状を生石の地にある浄土寺宛の公米の送り先が沖ノ浜であると解釈し、生石沖ノ浜の存在の根拠とするが、鹿毛(2008)によれば、これは山香郷向野の浄土寺に集めた年貢米を府内に輸送することを述べたものである。したがって、生石沖ノ浜の存在の根拠とはなりえない。

なお、本稿で示す史料1から5が、今津留沖ノ浜或いは勢家沖ノ浜のどちらを指しているのか、触れてみたい。前述の通り今津留沖ノ浜が存在したのは、中川氏が入封した1594年から1596年の豊後地震までの期間である。このことから史料4を除けば、他史料に記す沖ノ浜は明らかに勢家沖ノ浜を指すものと考えられる。

### 3.9 山村の説

山村(2009)は中世後期の大分川河口に位置した港湾について、文献史料で確認ないし推定される立地や地形条件を可能な限り詳細に復元した上で、その位置を推定した研究である。そして、最も早くに史料に登場する港湾は建長七年(1255)の史料『造宇佐宮豊後国行事所下文案』に記された勢家津であり、次いで、16世紀以降、府内の港湾として登場するのが沖ノ浜であるとしている。さらに、勢家津と沖ノ浜の関係について、「中世末期の史料に勢家津は登場しない。これは勢家津が港湾として利用されなくなったことを示唆するが、なぜであろうか」と疑問を提起した上で、「最も頻りに史料上確認される沖浜は、春日浦から砂州で結ばれた陸繋島ないし沿岸州であったと推定されている。この推定を踏まえるならば、沖浜は別府湾に面した港湾であったということになる」と述べたのち、勢家津の衰退は南蛮船(大型船)の来航に起因するものと考え、「勢家津のような浅い港よりも、外洋に面した沖浜の方が着船しやすかったのではないだろうか」、「また、勢家津の水域に堆積が進んだために、大型船の利用が困難になった可能性もある」と述べている。そして、勢家沖の別府湾の海域に沖ノ浜の位置を落とし込んでいる。ただし、位置推定において府内からの距離に関する言及はない。

山村の説は勢家津と沖ノ浜の関係について記述するなど、興味深い研究であり、筆者も山村(2009)の

見解に概ね同意できる。

### 3.10 都司・松岡の説

都司・松岡(2011)は、府内から沖ノ浜までの距離について、5つの文献を引用して、

- 1) 『日本一鑑(桴海図経)』によると、2.75～3.3 km
- 2) フロイスの『日本年報』によると、4.8 km
- 3) フロイスの『日本史』によると、3.75 km
- 4) 『豊府紀聞(聞書)』によると、「府城」から北西 2 km で勢家村、そこから 2 km 北
- 5) 『豊府聞書』によると、北 4.8 km

と提示したうえで、「5件の文献で多少の差はあっても、府内から沖ノ浜(瓜生島)までは約 4 km と考えて誤りはないであろう」と述べ、さらに 4) の記述をもとに、明治四十三年(1910)発行の 5 万分の 1 地形図の上で 勢家北方 2 km(大分川河口の沖合)の海域に沖ノ浜の位置を落とし込んでいる。

しかし都司・松岡の説が指摘する地点を別府湾諸港海図(大正十三年海軍測量)で確認すると、水深が 30 m を超えており、そこに沖ノ浜があったとは考え難い。また、沖ノ浜の位置を『豊府紀聞(聞書)』に基づいて推定しているが、『聞書』が成立した時期には、既に沖ノ浜(瓜生島)は消失し、存在していないので、距離や方位は古老からの聞き取りや伝承によるものと思われ、数値の信頼度は低い。さらに、距離の起点である「府城」(史料 3 参照)を府内大友館付近と考えているが、大友館を城と称した史料は皆無である。府城とは近世に建設された府内城を指していると考えるのが自然であろう。よって、『豊府聞書』に記された距離を用いて位置を推定するのは問題がある。

### 3.11 玉永の説

玉永(2013)は戦国時代の豊後府内の性格や構造を、空間構造の観点からとらえて所見を述べた論説である。前述した『戦国時代府内絵図』をトレースし模式図『府内古図に描かれた豊後府内町』(図 4)を表しているのが注目される。

沖ノ浜の位置については、今津留説があることにも触れた上で、「沿岸洲(5 号地沖)」にあったとする加藤を代表とする見解[加藤(1978), 『大分市史 下』(1988)]と、「住吉川河口西岸を概念的に想定する」鹿毛(2008)等の 2 つの代表的な考え方がありと述べている。そして加藤の見解では沖ノ浜はすでに海没しており検証できないとして、住吉川河口西岸説について地積図を中心とした検証を行い、「勢家周辺の地

積図に残る道路や町場痕跡についてみると、これらの痕跡は、正保絵図の町割りとよく符合する」ことを根拠に、住吉川河口西岸説に賛同するとして、勢家付近の陸域に沖ノ浜を図示している(図 5)。なお、鹿毛(2008)自体は、「住吉川河口西岸の勢家・住吉地区と、そこから海に突き出た砂州の沖浜」と言及するに留まり、沖ノ浜の位置を現地形と対比していない。

玉永(2013)の『絵図』(図 4)では新町・裏町・本町集落の所に 沖ノ浜 と記載されている。枠付きの地名は、玉永(2013)による加筆であり、オリジナルの『戦国時代府内絵図』に記されているものではない。ただこの地点が沖ノ浜であることには同意できる。しかし、沖ノ浜を現在の地形図に落とし込む際に、当時も現在も陸域と考えられる地点に図示しており(図 5)、これは沖ノ浜が海没したという史実と矛盾する。

なお、玉永(2013)のトレース自体(図 4)についてであるが、『絵図』の縮尺は大友館周辺の府内中心部は拡大、これに比し塩九升町、長濱通り及び勢家地区は縮小して描かれているものの、大友館から見た神社仏閣等の方位は正確である。そして、神社の鳥居の向き、紙の破損等の細部までを忠実に『絵図』からトレースしており、また実質は大分市教育委員会文化財課によるトレースであることから、充分信頼に足るものと考えられる。

### 3.12 松岡の説

松岡(2015)は今津留村に着目し、今津留村と沖ノ浜の関係について述べている。

沖ノ浜の位置については、都司・松岡(2011)の主張を若干変え、現在の 5 号埋立地に「沖ノ浜？」と図示しているが、根拠は説明されていない。しかし結論としては、「現在のところ沖ノ浜の正確な位置は不明であり、今津留村に含まれていたと断定する証拠も存在しない。そのため、沖ノ浜が今津留村の中に存在したかどうかは分からない。しかし少なくとも、以上の検討結果から、秀吉朱印状中にある船着は今津留村内に存在した湊であると考えられるだろう」と述べている。

従来、勢家村と沖ノ浜の関係について多く論じられてきたところ、松岡の説は岡部の説と同様に、今津留村と沖ノ浜との関係を捉えた視点には留意したい。今津留にも沖ノ浜があった点は同意見である。

### 3.13 別府重点の説

文部科学省研究開発局・国立大学法人京都大学大学院理学研究科(2017)による別府一万年山断層

帯(大分平野—由布院断層帯東部)における重点的な調査観測[別府重点(2017)と略す]は、マルチナロービームや音波探査の結果から、5号埋立地沖には「海底斜面崩壊で形成されたと見られる海底斜面の凹凸や流山が多数認められる」とし、ピストンコア試料で確認された最も上位のメジャーイベント層(タービダイト層)の形成年代が慶長・豊後地震の年代に近いことも勘案して、「慶長・豊後地震では、かつて存在していた陸(砂州)の一部(瓜生島として知られる)が突如海に沈んだという伝承があるが、その痕跡が海底の流山やタービダイト層として残っているとしても不思議ではない」と述べ、沖ノ浜を「瓜生島」調査会の説とほぼ同じ範囲の埋立地沖と推定しているようである。別府重点(2017)が指摘するタービダイト層の形成年代については、豊後地震の際に別府湾で大規模な地盤変動が発生したことを立証する有力なデータと考える。

ここで、大分県立先哲史料館(2016)は、別府重点(2017)で確認された5号埋立地沖の流山について、「沖の浜(瓜生島)」の岩屑なだれの痕跡である可能性が極めて高い、「少なくとも砂州の砂地盤だけが崩壊したのではなく、ある程度固結したブロックが崩壊したと判断され」と述べている。そして、その根拠として、1792年の雲仙・眉山の山体崩壊により形成された九十九島を事例としてあげている。

しかし九十九島は、現在(標高695 m)よりも150 m程高かった眉山が崩壊[北原・他(2012)]し、山体が速度を持って海中に突入した結果形成された地形であり、標高が数十 mを超えるとは考えられない瓜生島(沖ノ浜)と同列で考えることはできない。清水(2015)によれば、5号埋立地周辺の沖積層基底深度は-60 m程度であり、地下浅部に岩体が存在するような情報は得られていない。また村田(2001)は、「当地域の沖積層は大分川と大野川の複合三角州で構成され、この岩質は有機質シルト、砂、シルト、礫等からなり、このほかに、腐植物、貝化石やアカホヤ火山灰などがあり、下位より基底礫層、下部砂層、中部泥砂層、上部砂礫層、最上部泥層に区分され、大分層群の上に不整合にのっている。…(略)…瓜生島の地盤はこの複合三角州からなっていたものと思われる。」と述べる。仮に大規模な岩体のすべりの結果、沖積層の基底深度が-60 mになったのであれば、より深い前面の海中に巨大な移動岩体が存在しているべきと思われるが、そのような巨大岩体すべりを示唆する調査結果は承知しない。また、大分県立先哲史料館(2016)は、「岩

屑なだれによって運ばれた土塊は水深10 m付近から確認され、少なくとも水深55 m付近まで流れ下っている」と述べるが、水深から判断すると(基底深度が-60 mであることから)、これらの土塊(流山)が巨大岩体すべりの結果形成されたものとは思えない。さらに別府重点(2017)が指摘する流山は主に5号埋立地沖に存在する(図1で言えば、住吉泊地港口付近から現大分川河口付近にかけて分布し、その東西の幅の中央付近に多くが分布する)が、沖ノ浜が推定される勢家北方より幾分東側にずれている。仮に加藤(1991)が比定する地点に瓜生島があり崩壊した場合、流山の多くはその北方に流下するはずである。加えて、最新のタービダイト層の形成年代が豊後地震の年代に近いとしても、流山の形成年代も同じとは必ずしも言えないのではなかろうか。

したがって、流山は瓜生島(沖ノ浜)の崩壊によって生じたものではなく、また沖ノ浜は固結したブロックから構成される島ではなく、やはり砂を主体とする地形だったと考えるべきであろう。

#### §4. 既往研究の比定場所と見解が分かれる理由

§3でみたように、既往研究の多くは、沖ノ浜(瓜生島)の位置を5号埋立地周辺や住吉川河口西岸に比定している。しかし一方では、沖ノ浜を今津留から生石(菌菖)にかけての広域とする指摘もある。そこでまず既往研究が比定する場所、地域を以下に整理する。

##### 1) 埋立地沖

「瓜生島」調査会の説  
羽鳥の説  
三澤・他の説  
都司・松岡の説  
別府重点の説

##### 2) 5号埋立地～住吉泊地～春日浦埋立地

『大分市史 下』の説:住吉泊地西部～西日本電線山村の説:勢家町沖の別府湾(旧汀線沿岸海域)  
松岡の説:5号埋立地

##### 3) 住吉川河口西岸(勢家陸域)

『大分市史 中』の説:ただし一部は海域  
玉永の説

##### 4) その他

大森の説:菌菖  
今村の説:大分市北方・別府市東方の海上  
岡本の説:大分川河口付近

## 岡部の説:今津留～生石

見解は、①埋立地沖、②埋立地、③さらに内陸の3つに区分することができよう。そして、このように見解が分かれる根本的な理由は、位置を記した史料についての吟味検証が充分になされなかったことにある。その上で、「瓜生島」調査会が沖ノ浜を海没した瓜生島と認識し、その位置特定のため海底探査にまい進したために論点が歪められた、言い換えれば島の幻影に皆が引きずられてしまったことが一つ目の大きな理由ではないかと考える。しかし、沖ノ浜は根っこに岩体が存在する島ではなく、砂を主体とする地形だったと考えるべきであることは、3.13 で述べた。地質調査所(1997)も、「少なくとも基盤岩が露出するような島がそのまま地殻変動によって沈没したとは考えられない」、「別府湾南岸に存在した砂州状の島が液状化及び津波によって流失したものと考えるのが妥当」と述べている。さらに榎原(2020)も、文献史学の観点から、「瓜生島の沈下説は元禄期成立の『豊府聞書』に初めて登場し、近世末期に『豊陽古事談』に「瓜生島の図」が掲載されたことによって流布したものであり、現在では、沖ノ浜の被災が誇大化された俗説であるとの見解で一致をみている」と述べる。そこで、以降では“瓜生島”ではなく、“沖ノ浜”として位置を論じていく。

二つ目の理由として、地名としての沖ノ浜の定義に起因すると筆者は考える。つまり、岡部の説が指摘するように、港湾エリアとしての広義の沖ノ浜と船着場としての狭義の沖ノ浜が存在すると考えられるところ、これらを混同して議論が多くなされているため、混乱が生じていると考える。筆者の考える沖ノ浜を以下に整理する。大きく3つの沖ノ浜があると考ええる。

### 1) 港湾エリアとしての沖ノ浜

大分川河口を中心とした領域で、大型船が停泊できる十分な水深を擁する海域と、浅瀬部及び船着場からなる。大分川河口からその東西沿岸域にわたる広い領域。

### 2) 船着場としての勢家沖ノ浜

大分川左岸の船着場で、津波被災時は早川氏が支配していた。永禄七年冬に豊後から海路畿内に向けて旅立ったフロイスもこの船着場を利用した。史料2で言及されている日本人切支丹ブラスが宿泊所を営んでいたのもこの地域。

### 3) 船着場としての今津留沖ノ浜

大分川右岸(あるいは中州)に位置した船着場。津波被災時は中川氏支配で船奉行柴山勘兵衛の宅所や倉があった。現在の今津留は大分川の右岸に位置するが、『戦国時代府内絵図』は、中州に今津留村を示している。こうした中州に今津留沖ノ浜があった可能性も考えられる。

三つ目の理由としては、船着場のイメージがあげられる。港湾というと、つい現在の横浜港や神戸港のような施設をイメージしてしまうのか、南蛮船が陸地(船着場としての沖ノ浜)に直接接岸したような印象を与える既往研究がある[鹿毛(2008), 玉永(2013)等]。慶長年間当時、喫水の深い南蛮船が陸上岸壁に直接接岸できるような機能(設備)は長崎、平戸でも有していない。南蛮船は、干潮時に座礁しない位置(言い換えると陸地にもっとも近接できる位置)に投錨停泊し、そこから舳で陸上に人や物資を運搬した。南蛮船が洋上に停泊し、沖ノ浜の船着場に物資が陸揚げされるイメージを図6に示す。山村(2009)は、勢家津が衰退し沖ノ浜が栄えた理由として、「勢家津のような浅い港よりも、外洋に面した沖浜の方が着船しやすかった」と述べているが、頻繁に訪れるようになった南蛮船に対応して、舳用の船着場が必要となり、勢家津の沖にあった砂地に護岸を築造して“沖ノ浜”を新設したと考えてはどうだろうか。

四つ目の理由は、岡本(1956)が指摘するように、史料によって距離が揺れていることや、イエズス会宣教師の報告におけるレグアという長さの単位の邦訳が訳者によって異なっていることも、混乱を助長していると考ええる。また、距離の起点は一般には府内からとされているが、府内のどこからかも明確にされていない。

最後に五つ目の理由は、史料に記されている沖ノ浜までの距離を、3.4で示した加藤(1978)に代表されるように、直線距離と解している点にある。陸上における距離は、歩行経路を勘案した推定を行うべきと考ええる。

理由1～3についての見解は上述したとおりであり、引き続き§5, §6では、残り2つの理由、すなわち距離・起点と経路について整理を行う。なお、以降で考察する沖ノ浜は勢家沖ノ浜のことである。

## § 5. 距離・起点の問題

府内から沖ノ浜までの距離について記した史料としては、§ 2 で前掲した、『日本一鑑』、イエズス会史料、『豊府聞書』がある。このうち『豊府聞書』は、地震から約 100 年の後に成立した史料であり、歴史上は存在しなかった瓜生島について記していることを勘案すると、記述された距離の信頼性は低いと考えざるを得ない。よって、同時代史料である『日本一鑑』とイエズス会史料の記述が最も信頼性が高いと判断する。

### 5.1 イエズス会史料から

#### 5.1.1 距離について

5 つの出来事で、沖ノ浜までの距離についての記載を確認できる。そして、イエズス会史料には、フロイスの『日本史』とそのもととなった宣教師の書簡、さらには複数の邦訳があるので、これらを表 1 に整理した。

表 1 の①～④の出来事では半里または一里と記述されている。イエズス会宣教師の母国語であるポルトガル語版から邦訳された村上訳や José Wicki による『日本史』のポルトガル語原文(活字本)を確認すると、単位はレグア(legoa)となっている(表 1)。また⑤の邦訳は、ラテン語版からの邦訳とイタリア語版からの邦訳があり、三千(歩)や三哩と訳されているが、ポルトガル語原文(臼杵市教育委員会蔵)を確認すると、「hũa legoa de Funai escala」とやはり 1 レグアなのである。さらに、①の「半里足らず」との記述であるが、José Wicki の『日本史』によると、「mais de meia legoa」と記述されている(表 1)。厳密には、「半レグアもしくはそれ以上」と邦訳されるべきものであろう。これらより、フロイスらは府内から沖ノ浜までの距離を、半レグア以上、1 レグア未満の距離、換言すれば 1 レグアに満たない距離と認識していたと解釈する。

#### 5.1.2 起点について

次に、府内の起点についてであるが、参考とすべき 3 つの記述を表 1 から以下に抽出する。

- 1) 1560 年 ガーゴ離日(松田の報告集)  
「教会を後にしてナヴィオ船がいる港に向かったが、大勢のキリシタンや婦女子が長時間我らについてきた。…(略)…幾人かはおよそ一里ついてきた」
- 2) 1564-1565 年 フロイス上洛(松田の報告集)  
「修道院とキリシタンらに別れを告げたが、彼らは船までの一里を我らに随伴した」

3) 1586 年 豊後からの避難(完訳フロイス日本史)  
[松田・川崎(2000)]

「府内から船で山口へ運ぶことにした。だが、人々に悟られぬように学院からそれを持ち出して、半里も離れたところにある海の港まで、人目につかずに運搬するためには、大箱とか籠に入れて行くことは不可能であった」

3 つの邦訳から、歩行経路の起点は、教会、修道院、学院であり、終点は港または船であることがわかる。教会、修道院、学院の建造物は、宣教師の利便性や安全を考慮し、最も重要な宗教施設であるダイウス堂の敷地内又は近傍に全てあったと考えられることから、宣教師の記録の府内側の距離の起点はダイウス堂と判断しても差し支えないと考える。したがって、沖ノ浜はダイウス堂から半レグア以上、1 レグア未満の距離にあったと判断する。

なおダイウス堂の位置であるが、『戦国時代府内絵図』(図 4)において、大友館のやや上(方角でいうと西側)にダイウス堂が示されている。『中世大友府内町跡発掘調査』(大分県教育委員会)において、『絵図』に描かれているダイウス堂付近から切支丹と思われる埋葬遺体が発見されたことから、県教委は当該地(『絵図』では中町、現在は顕徳町 2 丁目)をダイウス堂跡と判断している[田中(2008)]。

#### 5.1.3 レグアの単位長について

まず、hũa 又は huma legoa(1 レグア)は 16 世紀のポルトガル(葡)語の表記であり、現在のポルトガルでは um legua 又は uma legua と綴り、1 レグアは 5,572 m 又は 6,000 m とされている[池上・他(2005)及び友田(1987)]。しかし、1 レグアの距離(長さ)は、時代と地域で異なる。このため、フロイスの頃は 1 レグアを如何に認識していたかを考えることにする。ここで、『1596 年日本年報補遺』における huma legoa 部分がラテン(羅)語版で tribus millibus、イタリア(伊)語版で tre miglia と訳されていることに注目したい。つまり当時の欧州人は以下のように換算し、これを等しく捉えていたと考えることができる。

huma legoa(葡語) = tribus millibus(羅語)

huma legoa(葡語) = tre miglia(伊語)

羅語版の tribus millibus を邦訳版では三千(歩)と記している(表 1 の⑤の松田の報告集)が、これは三千複歩の意味である。複歩(passus)とは古代ローマ

の距離単位で、身体尺の二跨ぎ(つまり二歩)のことで、1複歩は1.48 mと定められていた[二村(2002)]. これからすると tribus millibus(三千複歩)は 4.44 km になる。

また、伊語版の tre miglia を邦訳版では 3 哩として いる(表 1 の表下注釈⑤). miglia の単数形 miglio は イタリアで使用されるマイルの単位で、秋山(2011)や 二村(2002)によれば、イタリアには近代ローママイル (1,489 m)と古代ローママイル(1,476 m)が存在したと いう。フロイスの頃はどちらを使用したか判らないが、 仮に平均を取って 1 miglio を 1,482 m とすると、tre miglia は 4.446 km となる。フロイスが記す 1 レグアは 約 4.4 km と判断するのが妥当と考える。

なお、岡本(1956)がフロイスの距離の記述につい て「まちまちなことを記している」と 3.3 で述べたが、こ れは上述したような葡語原文から伊語版を経て邦訳 される際の単位の取り違い(1 レグア→3 イタリアマイル →3 哩)や里と哩の混同が原因であったと考える。 この問題はポルトガル語原文を確認することで解決 するものの、フロイスの記述に半レグア～1レグアの幅 は残る。

#### 5.1.4 メートル換算した距離

府内ダイウス堂から沖ノ浜までの距離は、半レグア 以上 1レグア未満であり、1レグアは約 4.4 km と考 えるのが妥当であることから、沖ノ浜までの距離は 2.2 km 以上 4.4 km 未満となる。

#### 5.2 『日本一鑑』から

史料 1 で示したように、鄭舜功は、沖ノ浜と府内と の距離を、「府内に陸行するに凡そ五・六里」としてい る。ここで、鄭舜功が用いた里は“明里”であることに 留意したい。中国では、尺は地域や時代及び用途に より長さが異なるが、「1800 尺を一里とするのは歴代 不変」[小泉(1991)]である。当時の明国で、土地の 測量に用いられたのは量地尺と云い、一量地尺は 0.327 m であった[阮・李(1994)]. したがって 1 明里 は、0.327 m×1,800 であり、589 m となる。つまり五・ 六里は、2.9～3.5 km を指していたことになる。

さらに、鄭舜功は沖ノ浜に上陸し大友館に直行し たので、この場合、起点は沖ノ浜、終点は大友館であ る。府内側の距離の起点をダイウス堂とした場合には、 大友館を起点とするよりも約 200 m 短くなる。大友館 がダイウス堂よりも東にあるためである(図 4)。とす ると、ダイウス堂から沖ノ浜までの距離は 2.7～3.3 km と

なる。

#### § 6. 経路の問題

ダイウス堂から沖ノ浜までの経路を、『戦国時代府 内絵図』(図 4)から推定する。大きくは 3 つの区間に 分けられる(図 7)。

##### 1) 第 1 区間

ダイウス堂を出て、中町の通りを北上。下町、穴打 町を経由し長池町(現長浜小学校の西)まで。この区 間は拡張されたが東新町通りとして旧道が遺る。

##### 2) 第 2 区間

左折して長池町の通りに入り、ほどなく北西に折れ、 旧・塩九升町、長濱通りを経由し、仙(千)石橋まで。 このルートは現存しないものの、仙石橋は戦前まで存 在し、『絵図』で仙(千)石橋のたもとに描かれた一之 宮(住吉社)は現存する。また、府内城は当時存在せ ず湿地帯であったことを勘案すると、長池町から現府 内城内堀の南西端をかすめて仙(千)石橋に至るル ートが推定される。そして、湿地帯または沿岸域であ ることから、丘陵、大規模な街並み等の支障物はなく、 ほぼ一直線のルートであったろうと推定する。

##### 3) 第 3 区間

仙(千)石橋を渡り、一之宮(住吉社)の西側へ出て 勢家に入り、さらに北行して沖ノ浜に至る。この区間も 拡張されたが旧道として遺る。

推定したルートが大正三年測量の地形図に落とし 込んだのが図 7 である。図 7 より、ダイウス堂から仙石 橋までが 2.2 km、埋立前の大正期の汀線までが 2.8 km であることが判った。またこの経路を、同縮尺の近 年の地形図に落とし込んだものが図 8 である。

#### § 7. 沖ノ浜の位置の比定

§ 3 及び § 4 で既往研究を整理し、既往の見解は、 ①埋立地沖、②埋立地、③さらに内陸の 3 つに区分 されることを示した。そして、「瓜生島」調査会の説[加 藤(1991)]に代表される「①埋立地沖」とする見解(図 1)の場合、大正期の海図(図 9)で水深を確認すると 20 m を超えており、3.13 で述べたように大規模な岩 体すべりの可能性は考え難いことから、沖ノ浜が埋立 地沖にあった可能性は低いと考える。また「③さらに 内陸」にあったとする推定も、海没したという史実に合

致しないことから、その可能性は低いと考える。これより、沖ノ浜の位置はある程度特定されてくる。そして § 5 と § 6 では、府内(ダイウス堂)から沖ノ浜までの経路を推定し、その距離が 2.2~4.4 km あるいは、2.7~3.3 km と推定されたので、さらに海底地形を考慮して位置の絞り込みを行う。

ただその前に、沖ノ浜の消失メカニズムについて再考したい。地震調査委員会(2017)は、「現在の大分市の埋め立て地付近にあった沖浜という場所が液状化や津波の被害を受けて水没した」と述べる。加藤(1991)等と同様の見解である。筆者は、沖ノ浜が液状化と津波の影響を受けて消失したとの指摘には概ね同意するが、それに加えて地盤沈下の影響も受けたと考える方が、説明性が高くなるのではなかろうか。地震調査委員会(2017)は、「慶長(文禄)豊後(瓜生島)地震」の際に「少なくとも⑩豊予海峡一由布院区間の一部が活動した」と述べているが、中央構造線断層帯の豊予海峡一由布院区間は「高角度北傾斜」の断層であり、1回のずれの量は2~5 m 程度(上下成分)とされている。沖ノ浜推定域の南方には、豊予海峡一由布院区間に属する府内断層が推定されており(図 10)、上記のような活動が生じた場合、沖ノ浜周辺では全体的な地盤の沈下が予想される。じっさい、豊後地震の時に地盤沈下があったことを示唆する史資料があるので、以下に紹介し見解を述べる。

## 7.1 沖ノ浜の地盤沈下を示唆する史資料

### 7.1.1 『三浦家文書』(1667)

別府湾南岸の大野川水系乙津川左岸にあった原村(現大分市向原:勢家の東方約6 km)の庄屋(三浦家)が所蔵する文書である。原村の惣百姓が高松代官所(現大分市日岡)に提出(言上)したものの控えて、「大地震大浪仕右之田畠大分損シ無田ニ成申候ニ付」とあり、これに続いて豊後地震前の原村の石高が128石であったが、地震後は32余石に激減した旨が記されている。さらに、原村の沖合にあった松崎村、住吉村の二村が「是ハ古へぢしん(地震)によりめつきやく(滅却)仕候」とあり、村そのものが消滅したことも記されている。このことから、原村付近では田畑が減少した事実があり、この原因は豊後地震で広域な地盤沈下があり田畑が海没したことによると考えるのが自然であろう。

### 7.1.2 『知行目録』(1601)[今津留の地震くづれ]

大分川右岸側の今津留にも地盤沈下を示唆する史料が存在する。慶長六年(1601)に關ヶ原の戦後処理として、徳川家重臣加藤正次他2名と豊臣家重臣片桐且元の4名の連名で、岡藩・中川秀成に与えた『知行目録』である。これには、「大分郡今鶴村 他三百五拾九石式斗二升 地震くづれ」とある。さらに萩原村でも605石の地震くづれが記されている。北村(1969)は、「今津留村のうち、359石余の地が慶長地震のため海没してしまっている」と解釈する。また、石橋(2019)は、「地震崩」という言葉が見えるが、「地震動で崩れた」という意味ではなくて、地震・津波で耕作不能になったということだろう(強震動による液状化の影響もあったかもしれないが)」と述べる。中川氏は、今津留沖ノ浜の船着場を、地震後の慶長二年(1597)の冬に今津留本村に移転している。地震動や津波による被災のみであれば、同じ地点での復旧がなされるのが自然であろう。同地復旧が不可能だった理由として、地盤沈下により土地自体が消滅したと考えてはどうか。また、地震後5年を経ても耕作不能の田畑が多かったという事実は、冠水による塩害や地震による液状化の影響だけではなかったのではなかろうか。長年に及ぶ耕作不能は、4名の重臣達に中川氏の復旧・復興策に疑念を抱かせる恐れがある。復興がならなかった大きな理由があったと考える。今津留村の石高は、慶長六年(1601)時が105石で、元禄十四年(1701)時でも101石である。地震から100年以上経過しても石高が地震前の数値[文禄三年(1594)で462石]に回復していないのである。長期に亘る石高の減少は、塩害のみでは考えられない。さらに4名の重臣らが、夫役、軍役に関わる公式文書(『知行目録』)において、石高の減少を了解・納得したのは、明白な理由があったのではないか。液状化であれば、整地し直すことで復旧・復興が可能であろう。やはり土地の消滅(海没・地盤沈下)があったと考えるべきと判断する。そしてその地盤沈下をもたらした地殻変動の結果、別府重点(2017)で得られたタービダイト層が形成されたと考える。

### 7.1.3 『豊国紀行』(1694)

福岡藩の儒学者貝原益軒が石垣原合戦の戦跡をめぐる旅で、別府村の里人から過去の様子を聞き、「此百二十年程前の事なりしに、別府の辺大地震して、古へ有し別府村は悉く海となる。古の別府は今の町の数町東に有。其所今は海となりて其跡もなし。昔別

府の村の西に有し温泉、今の別府の東の海邊に有…(略)…今の別府は其後新に立る町也。」と記している。別府村海没の話をつづけた助右衛門は、「別府村に助右衛門とて、ことし元禄七年(1694)、八十歳に近き老翁あり」とのことなので、1615年頃の生れであるため、豊後地震を経験していない。しかし地震で生き残った親世代から直接聞いた話であると思われ、助右衛門を含む当時の別府の人々は海没と認識していたようであり、海没(地盤沈下)という事象があったという言伝えは信頼度が高いのではなかろうか。

#### 7.1.4 石辺・島崎(2005)

豊後地震の津波波源推定を試みた研究であり、別府湾海底活断層系を波源モデルとして地殻変動を計算し、湾内の隆起域と沈降域とを上下変位量として図示している。そして、「音波探査記録から推定した断層変位を用いて地表での鉛直変位を計算した結果、別府湾北岸(奈多、杵築、頭成、日出)で若干の地盤沈降、別府において隆起、大分側で大きく沈降した結果となった」と述べている。また、大分市の湾岸域では、「地震時の断層運動によって大きな地盤沈下が生じ、これが結果的に津波被害を拡大させたものと考えられる」と指摘している。さらに、石辺・島崎(2005)が示す図からは、沖ノ浜付近の地盤沈下は30 cm程度と読み取ることができる。府内断層等、別府湾南岸の断層群をモデル化していないので、これらによる沈下も考慮すると、もう少し大きな値が算出される可能性もある。

#### 7.1.5 別府重点(2017)

別府重点(2017)は、大分平野西部の府内断層周辺においてボーリング調査と地中レーダ探査を実施して、府内断層の低下側(北側)及び上昇側(南側)で確認された泥層の対比から、「800~400 cal BPの間に地表変位があり、その古地震イベントは西暦1596年の慶長豊後地震に相当する可能性を指摘」している。また、2000 cal BP以降に少なくとも3~4 mの上下変位を生じさせた古地震が推定できるとも述べている。

以上のように、豊後地震の際には沖ノ浜周辺では地盤沈下があったものと考えられる。豊後地震の際には、中央構造線断層帯 豊予海峡—由布院区間の一部が活動したと考え、変位センスは整合的である。地震調査委員会(2017)は豊予海峡—由布院区

間の1回のずれの量として鉛直成分で2~5 mを想定するが、豊後地震の際に1~2 mの沈下があったと仮定してみたい。かつての沖ノ浜は図6のような標高1~2 m程度の砂地に造成された船着場であったろうと考えられる。こうした砂地が、地震動あるいは液状化(側方流動)により護岸が崩れ、津波に襲われるとともに、1~2 m程度の地盤沈下により、満潮時に波に洗われるようになって、日常生活ができなくなり、人々は沖ノ浜から退去をせざる得なくなったのではないか。人が住めなくなった沖ノ浜の地は、地盤の嵩上げや再護岸などの手当が行われなかったため、年を経るに連れ波浪に浸食され、完全に海面下に没したと考える。広域な地盤沈下(地殻変動)により従前の陸域が海面下となる事例は、2011年東北地方太平洋沖地震で多く目にした光景である。

#### 7.2 勢家沖ノ浜の比定(海底地形による絞り込み)

まず地形的観点から考察する。山村(2009)は勢家周辺に比高1~2 mの浜堤の存在を指摘(図7)し、勢家の東側で浜堤が切れていることから、「ある段階において住吉川が直行して浜堤を分断した可能性」を指摘している。筆者も、豊後地震以前に、勢家集落が立地する浜堤の東側を住吉川が北向して別府湾に注いでいた時代があったと考える。『戦国時代府内絵図』(図4)でも、勢家集落の東側を大分川(住吉川含む)が北流している。そしてその時には、勢家浜堤よりも若干低い砂地が勢家北側に広がっていたと考える。『絵図』をみても沖ノ浜(新町・裏町・本町)は、春日社よりも北に描かれている。しかし大正三年の地形図(図7)では春日神社と勢家集落はほぼ東西横並びであることから、中世には勢家沖に砂地が広がっており、ここが沖ノ浜だったと考えてよいのではなかろうか。

では、その砂地の北側海岸線はどこだったのか。『大分市史 中』(1987)が沖ノ浜の北に推定した旧海岸線は、大正期汀線の300 m程度沖に描かれている(図3及び図8を比較参照)。しかしこの位置では、前述したように全て(新町・裏町・本町)が海没したという事実と反する。一方では、図9に示す海図に着目したい。海図の水深は最低水面、換言すれば最も潮が引いた時の汀線:干潮時汀線(水深0 mの等深線)を基準面としている。図9を見ると、水深0 mの等深線は満潮時汀線(大正期汀線)の沖500 m程にある。さらに水深5 mの等深線がその300 m程沖にあ

り、その先は水深が急激に深くなり 20 m を超えてくる。したがって、沖ノ浜は大正期の水深 5 m 等深線(大正期汀線の沖 800 m)よりも南にあったと考える。そうすると、地震前の海岸線は、大正期汀線の沖合 300~800 m の浅海域にあったということになる。

そして、大正期汀線の沖合 300~800 m のほぼ中間である沖合 500 m に水深 0 m ラインがあるので(図 9)、沖ノ浜の北側海岸線を 0 m ラインと考えてみる(図 10)。当時の南蛮船の喫水は 2~3 m 程度であったと思われる。とすると、南蛮船を停泊させる水域の水深は安全を考慮し、少なくとも 5 m は確保したのではないか。図 9 から、水深 5 m 等深線から沖ノ浜北側海岸線(つまり水深 0 m ライン)までは約 300 m である。沖ノ浜の場合、停泊地から船着場までの距離が約 300 m であったという想定になる。この距離について、当時南蛮船が来航していた平戸、長崎、福田について検討してみた。明治期測量の海図からこの距離を読み取ったところ、各港とも概ね 300 m 以内であった。南蛮船が寄港する条件としては、地元情勢がまずは重要であるが、それに次いで、停泊地からのアクセスの良さが勘案されたと考えられる。北側海岸線を水深 0 m ラインとした仮定は、沖ノ浜に多くの南蛮船が寄港したという史実とも合致するものと考ええる。

ところで、沖ノ浜の消失のメカニズムについて、7.1 項末では 1~2 m の地盤沈下について言及したが、より具体的に、春日浦埋立地の南西を通る府内断層が北落ちしたと考えると、大正期汀線よりも沖(北)側の砂地が海没したと考えると、消失した面積は 0.4 km<sup>2</sup>(南北 0.5 km×東西 0.8 km)程度となる(図 10)。今津留で 359 石余の地が豊後地震のため消滅(海没)したことを先に述べたが、古くは 1 石の米が収穫できる田の面積が 1 反とされていた。太閤検地の天正十四年(1586 年)の定目では、等級ごとに反当たりの生産高が示されており、上田:1 石 5 斗、中田:1 石 3 斗、下田:1 石 1 斗とされている[小泉(1991)]。平均値として中田を採用すると、今津留で海没した田畑 359 石 $\div$ 276 反 $\div$ 約 0.3 km<sup>2</sup>ということとなる。田畑のみの数値であることを勘案すると、勢家側の約 0.4 km<sup>2</sup>という値もおかしな値ではない。

これより、かつて勢家北側には砂地が存在し、ここに沖ノ浜があり、その北側海岸線は水深 0 m ライン付近にあったと考えてよいと判断する。大正期汀線はダイウス堂から約 2.8 km の距離にあることは § 6 で述べた。そうすると、沖ノ浜があった可能性のある範囲は、ダイウス堂から 2.8~3.3 km の範囲となる。この範囲を

図 7 の上で破線の楕円として示す。史料で確認される 2.7~3.3 km あるいは 2.2~4.4 km という距離の範囲に入っている。

さらに町の南北の大きさについても考えたい。沖ノ浜には三筋の町があったとされている(図 4、史料 3)。図 4 に描かれている本町、裏町、新町は通りの名称であり、両側町である。時代はやや下がるが、近世府内城下の町割りは、道路に面する民家(敷地)の奥行を十五間(27 m)、道路を二~三間(4~5 m)と定めている[『大分市史 中』(1987)]。これから推定すると、三筋の町の南北方向の大きさは、(27 m + 4~5 m + 27 m)×3 筋で 175 m 程度となる。したがって、先に推定した区間(ダイウス堂から 2.8~3.3 km)の南北 500 m の範囲全てに亘って三筋の町があったとは思えない。三筋の町(船着場)は、沖合に停泊する南蛮船との利便性を考えるならば、極力陸域の先端部(水深 0 m ラインに近い位置)に設けられるのが自然であろう。沖ノ浜は、『大分市史 中』(1987)が新町を比定した場所(図 3)よりも海側、つまりダイウス堂から 3.0~3.3 km の位置に密集して存在したと考える。

以上の論考により、沖ノ浜はダイウス堂から 3.0~3.3 km の位置にあったと考えたい。この範囲を図 8 の上で破線の楕円として示す。そして、その推定範囲は、『大分市史 下』の比定とほぼ合致し、極一部は『大分市史 中』とも重なる地点となった。

## § 8. まとめ(勢家沖ノ浜の位置)

本稿では、まず、沖ノ浜(瓜生島)の位置特定を試みた既往研究を整理し、候補地としては、埋立地沖、埋立地、さらに内陸の大きく 3 つに分類できることを示すとともに、既往研究の問題点について所見を述べた。そして、見解(候補地)が分かれる理由として、①史料の吟味検証の問題、②沖ノ浜の定義の問題、③船着場のイメージの問題、④距離や起点の問題、⑤経路の問題について論じた。このうち、②③については、沖ノ浜という地名には、港湾エリアとしての沖ノ浜と船着場としての沖ノ浜(勢家沖ノ浜と今津留沖ノ浜)があることを指摘するとともに、船着場としての沖ノ浜のイメージを示した。そして④について、史料で記された距離を整理するとともに、レグアの単位長をフロイスら宣教師が如何に解していたかを考察し、1 レグアが 4.4 km であることを示した。さらに⑤については、信頼性の高い『戦国時代府内絵図』(図 4)を参考に、府内ダイウス堂から勢家沖ノ浜までの経路を明らかにした。その結果、これを近現代測量地図に落と

し込んで地形的考察等も行い、勢家沖ノ浜の位置が府内(ダイウス堂)から 3 km 強の春日浦埋立地の船溜まり「新湊」付近であることを示した(図 10)。本稿における比定結果は、『大分市史 下』の比定とほぼ合致する結果となった。

## 謝辞

大分県民にとって非常に大きな関心事である瓜生島(沖ノ浜)の位置を論ずるにあたって、石辺岳男氏及び匿名の方による査読、並びに編集委員の蝦名裕一氏のコメントは、本稿の改善に大変有意義でした。ここに記して深謝します。

対象地震: 1596 年豊後地震

## 文献

- 安芸良, 2016, 宗麟の海(挿絵), 大分合同新聞 2016 年 6 月 24 日号.
- 秋山余思, 2011, プリーモ伊和辞典, 白水社, 703.
- 榎原雅治, 2020, 文禄五年豊後地震に関する文献史学からの検討, 日本歴史, 865, 18-36.
- 阮智富・李鴻福, 1994, 中国歴代度制演変測算簡表, 漢語大詞典(附録・索引), 6.
- 羽鳥徳太郎, 1985, 別府湾沿岸における慶長元年(1596 年)豊後地震の津波調査, 地震研究所彙報, 60, 429-438.
- 池上岑夫・金七紀男・高橋都彦・富野幹雄・武田千香, 2005, 現代ポルトガル語辞典, 白水社, 1463pp.
- 今村明恒, 1946, 大寶元年及び慶長元年の陥没性本邦大地震に就て, 帝國學士院紀事, 第 4 卷, 第 3 号, 369-384.
- 石橋克彦, 2019, 同時代史料による文禄五年閏七月九日(1596.9.1)の伊予・豊後地震, 地震 2, 72, 69-89.
- 石辺岳男・島崎邦彦, 2005, 1596 年慶長豊後地震に伴う津波の波源推定, 歴史地震, 20, 119-131.
- 地震調査研究推進本部 地震調査委員会, 2017, 中央構造線断層帯(金剛山地東縁一由布院)の長期評価(第二版), 162pp.
- 鹿毛敏夫, 2008, 川からの中世都市, 戦国大名大友氏と豊後府内, 高志書院, 59-86.
- 神戸輝夫, 2000, 鄭舜功著『日本一鑑』について(正), 大分大学教育福祉科学部研究紀要, 22(1), 15-31.
- 加藤知弘, 1978, 瓜生島沈没, 葦書房, 133pp.
- 加藤知弘, 1991, 瓜生島沈没, Newton, 1991-8, 88-97.
- 加藤知弘, 1997, 府内沖の浜港と「瓜生島」伝説, 大分県立芸術文化短期大学研究紀要, 35, 1-11.
- 北原糸子・松浦律子・木村玲欧, 2012, 日本歴史災害事典, 吉川弘文館, 274.
- 北村清士, 1969, 中川史料集, 新人物往来社, 1053pp.
- 小泉袈裟勝, 1991, 凶解 単位の歴史辞典, 柏書房, 345pp.
- 松田毅一, 1987-1998, 十六・七世紀イエズス会日本報告集, 同朋舎, 全 15 卷.
- 松田毅一・川崎桃太, 2000, 完訳フロイス日本史, 中央公論新社, 全 12 卷.
- 松岡祐也, 2015, 文禄五年豊後地震による今津留村の被害と船着移転—中川家船奉行・柴山氏と今津留村について—, 災害・復興と資料, 8, 32-41.
- 松崎伸一・日名子健二・平井義人, 2017, 1596 年豊後地震における沖ノ浜の津波高 7 ブラサの検証, 歴史地震, 32, 57-76.
- 三澤良文・小菅晋・浜田政則・福江正治・北原道弘・中村隆昭, 1992, 瓜生島の消失とその原因へのアプローチ, 月刊海洋, 24, 3, 191-202.
- 村上直次郎, 1927, 異国叢書 耶蘇会士日本通信上巻, 駿南社, 461pp.
- 村上直次郎, 1936, 続異国叢書 耶蘇会士日本通信 豊後編 下巻, 帝国教育会出版部, 434pp.
- 村上直次郎, 1944, 耶蘇会の日本年報 第 2 輯, 拓文堂, 427pp.
- 村田茂雄, 2001, 豊後地震による津波についての一考察, 地質と調査, 87, 46-51.
- 文部科学省研究開発局・国立大学法人京都大学大学院理学研究科, 2017, 別府一万年山断層帯(大分平野一由布院断層帯東部)における重点的な調査観測 平成 26~28 年度成果報告書, 526pp.
- 二村隆夫, 2002, 丸善 単位の辞典, 丸善, 592pp.
- 岡部富久市, 2003, 別府湾の蜃気楼 瓜生島, 103pp.
- 岡本良知, 1956, 戦国時代の豊後府内港, 大分県地方史, 10, 1-28.
- 大分県立先哲史料館, 2016, 大地の歴史と私たちのくらし 慶長豊後地震と別府湾の海底地形調査, 18pp.

- 大分市史編さん委員会, 1987, 大分市史 中, 大分市, 1123pp.
- 大分市史編さん委員会, 1988, 大分市史 下, 大分市, 1246pp.
- 大森房吉, 1916, 大分県と地震噴火, 大正五年大分県気象報, 137-138.
- 清水龍来, 2015, 大分平野における断層構造を考慮した第四紀後期以降の地形発達, 国立大学法人信州大学 教育学部自然地理学研究室『2013 年度地理学野外実習報告書VI 大分』, 1-16.[https://soar-ir.repo.nii.ac.jp/?action=repository\\_uri&item\\_id=2394&file\\_id=65&file\\_no=1](https://soar-ir.repo.nii.ac.jp/?action=repository_uri&item_id=2394&file_id=65&file_no=1) (閲覧日:2020.6.1)
- 水路部, 1926, 別府湾諸港, 海図 1219 号. (大正十三年海軍測量・十五年発行, 第七管区海上保安部所蔵)
- 田中裕介, 2008, イエズス会豊後府内教会と付属墓地, 戦国大名大友氏と豊後府内, 349-376.
- 玉永光洋, 2003, 大友府内町, 戦国時代の考古学, 高志書院, 101-114.
- 玉永光洋・坂本嘉弘, 2009, 大友宗麟の戦国都市・豊後府内, 新泉社, 93pp.
- 玉永光洋, 2013, 戦国都市 豊後府内 空間構造と府内再移転を中心にして, 白杵史談, 103, 37-63.
- 友田金三, 1987, 新葡日辞典, 819pp.
- 都司嘉宣・松岡祐也, 2011, 文禄五年閏七月十二日(1596年9月4日)豊後国地震津波と瓜生島伝説について, 津波工学研究報告, 28, 153-172.
- 通商産業省工業技術院 地質調査所, 1997, 地域地質研究報告 5 万分の 1 地質図幅 福岡(14)第 76 号 NI-52-5-5 大分地域の地質, 65pp.
- 「瓜生島」調査会, 1977, 沈んだ島 別府湾・瓜生島の謎, 301pp.
- 山村亜希, 2009, 中世都市の空間構造, 吉川弘文館, 107-126.
- 『1596 年日本年報補遺』(イタリア語版):「Trattato d'alcuni prodigii occorsi l'anno M.D.XCVI. nel Giappone.」(Mercati Francesco, 1599).
- 『1596 年日本年報補遺』(ラテン語版):「De rebvs Iaponicis,Indicis,et Pervanis epistolae recentiores」(Ioanne Haye, 1605).
- 『文禄三年秀吉書状』及び『慶長六年知行目録』: 翻刻は, 神戸大学文学部日本史研究室, 1987, 中川家文書, 臨川書店, 333pp に所収.
- 『豊府聞書』(戸倉貞則, 1698) 由学館本(写本)を国立国会図書館及び国立公文書館が, 増澤本(写本)を大分市歴史資料館が所蔵.
- 『豊国紀行』(貝原益軒, 1694): 翻刻は森平太郎, 1939, 大分県紀行文集の 39-40 に所収.
- 『豊陽古事談』(仙玉補撰, 1857)
- 『三浦家文書』(1658-1877) 大分市歴史資料館所蔵: 翻刻は(株)大分放送 大分歴史事典刊行本部, 1990, 大分歴史事典に一部所収.
- 『日本一鑑』(鄭舜功, 1567-1573): 翻刻は「瓜生島」調査会, 1977, 沈んだ島 別府湾・瓜生島の謎の 182-190 に所収.
- 『日本史』(ポルトガル語原文): 翻刻は José Wicki, 1976-1984, Historia de Japam, vol.1-5.
- 『天正十三年浦上宗鉄書状』: 翻刻は鹿毛敏夫, 2008, 川からの中世都市, 戦国大名大友氏と豊後府内, 高志書院, 59-86 に所収.

## 史料

- 『1596 年日本年報補遺』(ポルトガル語原文) 白杵市教育委員会がマイクロフィルム所蔵: 翻刻・邦訳は, 松崎伸一・日名子健二・平井義人, 2017, 1596 年豊後地震における沖ノ浜の津波高 7 ブラサの検証, 歴史地震, 32, 57-76.

表1 イエズ会史料にみられる府内～沖ノ浜間の距離に関する記述

Table 1. Descriptions of the distance between Funai and Okinohama in the letters written by missionaries of the Society of Jesus

No.	出来事	完訳フロイス日本史 文庫本 (2000)	フロイス日本史 ポルトガル語原文 (活字本)	Historia de Japam (Jose Wicki) (1976-1984)	松田の十六・七世紀イエズス会日本報告集 (1987-1998)	村上直次郎訳 (1927-1944)
①	1559 ヴァイレラ上洛 ポルトガル語版から邦訳 【日本史1 p39 第1部22章】 「彼らは府内の司祭館に別れを告げた後、その町から半里足らずの沖の浜の港で乗船した。」 【日本史6 p199 第1部28章】 「それでもなお数名のキリシタンには、二里ほどまだ付き添って来ることを断り切れず、…(略)…」	「Despedidos da caza de Funai e embarcados em <b>Vogiofama, que hē pouco mais de meia legoa da cidade.</b> 」	①～④はポルトガル語版、⑤はラテン語版から邦訳 1561/8/17 ヴァイレラ書簡 【報告集Ⅲ-1 p393】 「(1559年、私、およびロレンソと称する日本人は豊後を発った。)(距離に関する記述なし)」	1561/8/17 ヴァイレラ書簡 【村上(1927) p23】 「右59年に予は道徳の事に付我等のイルマンに等しきロレンソと云ふ日本人と共に豊後を出発せり。」(距離に関する記述なし)	1561/8/17 ヴァイレラ書簡 【村上(1927) p23】 「右59年に予は道徳の事に付我等のイルマンに等しきロレンソと云ふ日本人と共に豊後を出発せり。」(距離に関する記述なし)	
②	1560 ガーゴ雑日 「それでもなお数名のキリシタンには、二里ほどまだ付き添って来ることを断り切れず、…(略)…」	「Sahindo da igreja o seguio hum grande numero de christãos homens mulheres e meninos …(略)… alguns christãos deixarem de o acompanhar <b>huma legoa</b> …」	1562/12/10 ガーゴ書簡 【報告集Ⅲ-2 p21】 「教会を後にしてナヴァイオ船がいる港に向かったが、大勢のキリシタンや婦女子が長時間我らについてきた。…(略)…強く言ったにもかかわらず、幾人かは <b>およそ二里</b> ついてきたが、…(略)…」	1562/12/10 ガーゴ書簡 【村上(1936) p6】 「食堂を出て船の碇泊せし港に向ひしが、キリシタン及び妻子の大軍速くまで見送り、我等が遂に留り我等の引返すまでは進まずと言ふまで帰らざりき。而して尚ほ数人は <b>約1レグワ</b> 来りたれば再び立止りて、殆ど皆帰るに至りたり。」	1562/12/10 ガーゴ書簡 【村上(1936) p6】 「食堂を出て船の碇泊せし港に向ひしが、キリシタン及び妻子の大軍速くまで見送り、我等が遂に留り我等の引返すまでは進まずと言ふまで帰らざりき。而して尚ほ数人は約1レグワ来りたれば再び立止りて、殆ど皆帰るに至りたり。」	
③	1564 フロイス上洛 【日本史7 p43 第1部55章】 「司祭たちは臼杵から府内に戻り、船を調達し、ついで司祭館の同僚たち、およびキリシタンたちに別れを告げたが、キリシタンたちは、二里離れたところまで船を見送った。」 【日本史8 p203 第2部86章】 「府内から船で山口へ運ぶことにした。だが、人々に悟られぬように学院からそれを持ち出して、半里も離れたところにある海まで、人目につかずに運搬するためには、大箱とか籠に入れて行くことは不可能であった。」	「Tornarão-se do Usuiqui para Funai e negociado o navio, se despedirão dos de caza e dos christãos, os quaes os forão acompanhando <b>espaço de huma legoa</b> athē a embarcação」	1565/10/25 アルメイダ書簡 【報告集Ⅲ-2 p268】 「我らは豊後へ戻ると船について交渉し、修道院とキリシタンらに別れを告げたが、彼らは船までの二里を我らに随伴した。」	1565/10/25 アルメイダ書簡 【村上(1927) p127】 「豊後に帰り船の談判をなして住院を辞し、1レグワの間キリシタンに送られて船に至りしが、」	1565/10/25 アルメイダ書簡 【村上(1927) p127】 「豊後に帰り船の談判をなして住院を辞し、1レグワの間キリシタンに送られて船に至りしが、」	
④	1586 豊後から山口への避難 本出来事は未収録	「… de Funai se embarcarem. Mas para se tirarem do collegio com dissimulação se levarem athē o <b>porto do mar, que era meia legoa</b> , de maneira que não fossem sentidos, não era possível levar nada d'isso em caixoes nem en cestos;…」	1588/2/20 フロイス書簡 【報告集Ⅲ-7 p173】 「府内から一里の所に、塩館からの大きくて安全な二隻の船が到着した」	1588/2/20 フロイス書簡 【村上(1944) p276】 「府内より1レグワの所に、塩館より甚だ大きく且堅固なる船が二艘着いた。」	1588/2/20 フロイス書簡 【村上(1944) p276】 「府内より1レグワの所に、塩館より甚だ大きく且堅固なる船が二艘着いた。」	
⑤	1596 豊後地震津波 本出来事は未収録	「 <b>hūta legoa de Funai escala.</b> 」	1596/12/28 フロイス年報補遺 【報告集Ⅰ-2 p307】 「府内に近く三王(桂)離れたところに、沖の浜と言われ多数の船の停泊港である大きな集落、または村落があり、この地に因んで沖の浜のプラサと呼ばれているこの善良な男は、他の諸国から集まってくる種々の人々に自分の家を宿泊所として提供していることから、豊後では非常に有名なある。」	1596/12/28 フロイス年報補遺 【報告集Ⅰ-2 p307】 「府内に近く三王(桂)離れたところに、沖の浜と言われ多数の船の停泊港である大きな集落、または村落があり、この地に因んで沖の浜のプラサと呼ばれているこの善良な男は、他の諸国から集まってくる種々の人々に自分の家を宿泊所として提供していることから、豊後では非常に有名なある。」	本出来事は未収録	

出来事の説明

- ①宣教師ヴァイレラが沖ノ浜から都に向けて出立した時の記述である。
- ②1552年から1560年の間、府内に滞在した司祭ガゴが印度(ゴア)に帰る時の記述で、ナヴァイオ船(南蛮船)が港(沖ノ浜)に停泊している。
- ③永禄七年の冬にフロイスとアルメイダが畿内に向けて出立した時の記述で、悪天候(逆風)のため沖ノ浜の宿泊所に長期滞在を余儀なくされた。
- ④1586年から1587年にかけて、島津軍が府内に進行してきており、町は緊迫した状況下にあった。その混乱の中、豊後から山口に避難するために、宣教師らが教会用具を府内の学院から港(沖ノ浜)まで運ぶ様子を記している。
- ⑤1596年豊後地震津波における豊後府内の被災状況を報告したものである。この出来事については、イタリア語版からの邦訳もある。  
【大分県史料(14) p241】(イタリア語版からの邦訳)  
「府内の近くに、三哩離れたオキノアアアと呼ばれる大きな村があります。この立派な男は、この地名にちなんでオキノアアマのピアオと呼ばれ、豊後では良く知られています」

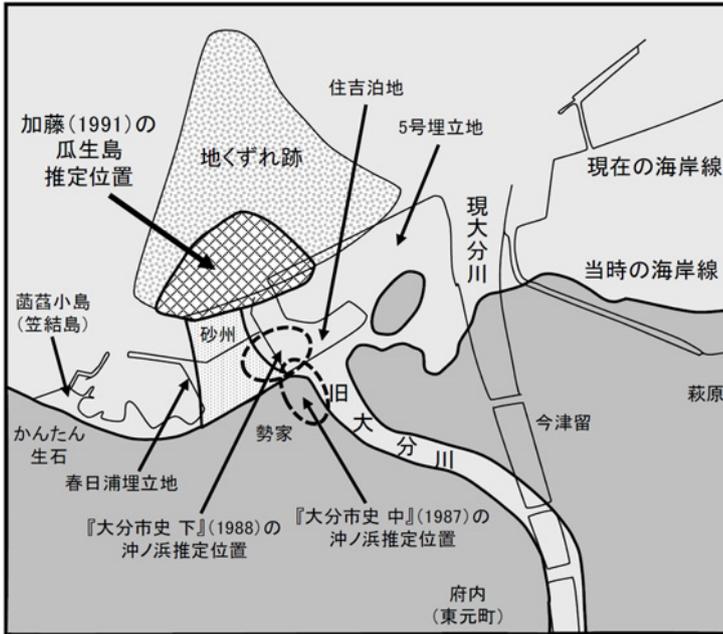


図1 加藤(1991)による瓜生島の位置推定  
[加藤(1991)の図をトレースし地名等を加筆]  
Fig.1. Estimated location of Uryu-jima after Kato (1991)  
[Names of places are added to Kato(1991)]

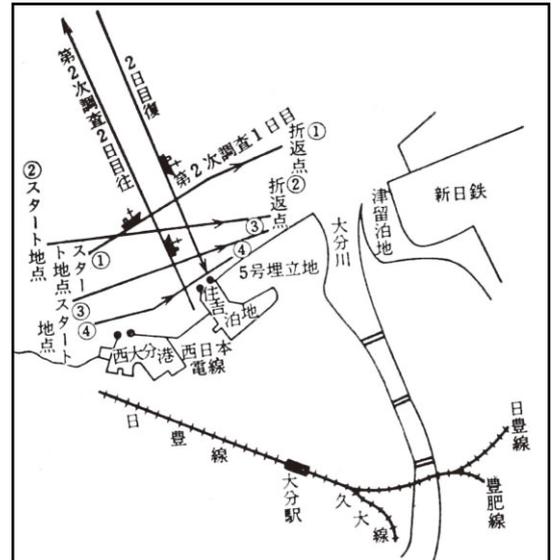


図2 海底地層探査船のコース[加藤(1978)]  
Fig.2. Course of the sea bottom stratum survey ship conducted by Kato (1978)

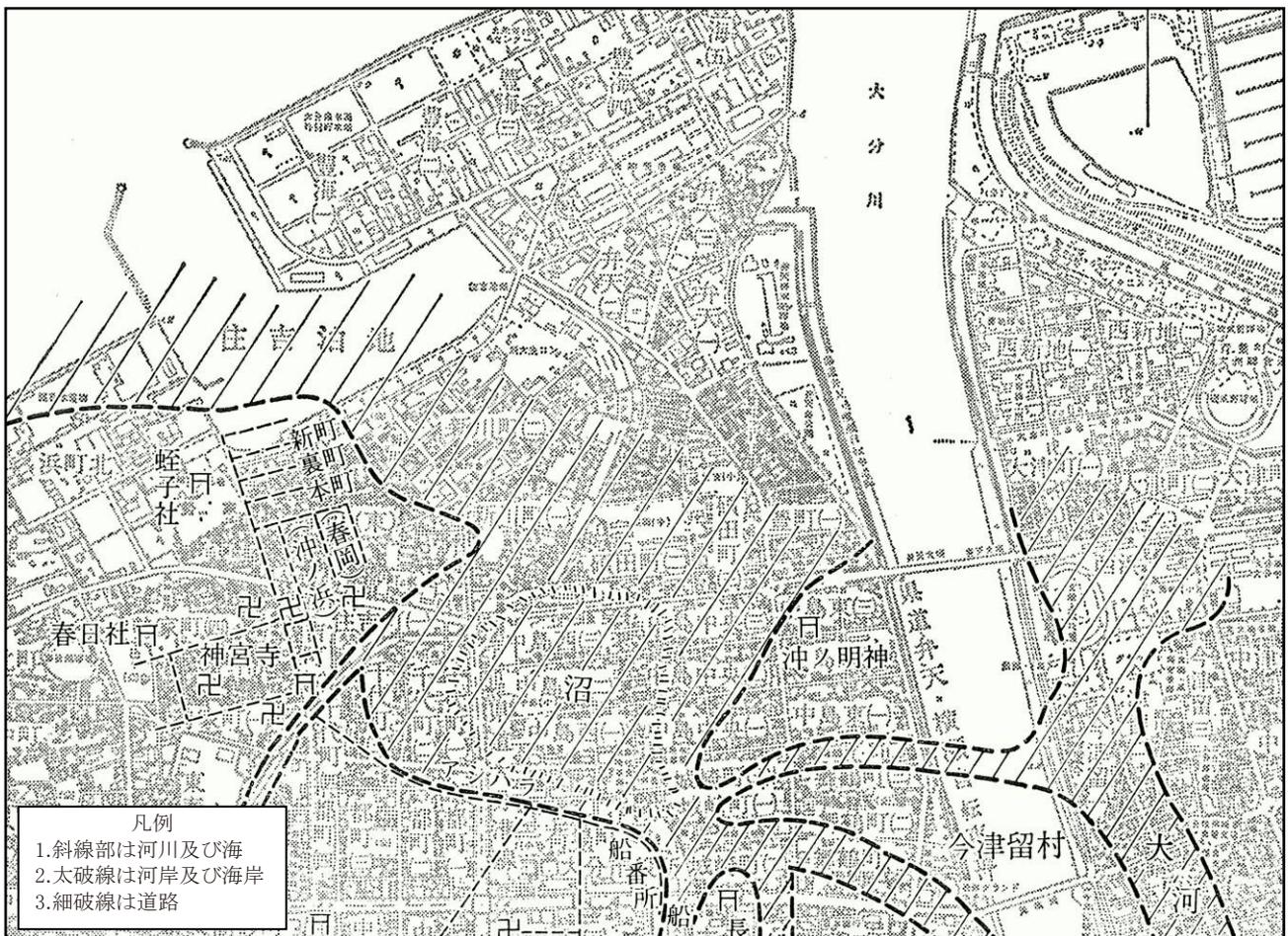


図3 『戦国時代の府内(府中)の町と沖ノ浜復原想定図』 [『大分市史 中』(1987)から引用し凡例を加筆]  
Fig.3. Restored map depicting how Funai and Okinohama were located in the Sengoku period  
[Explanatory notes are added to Oita City History (1987)]

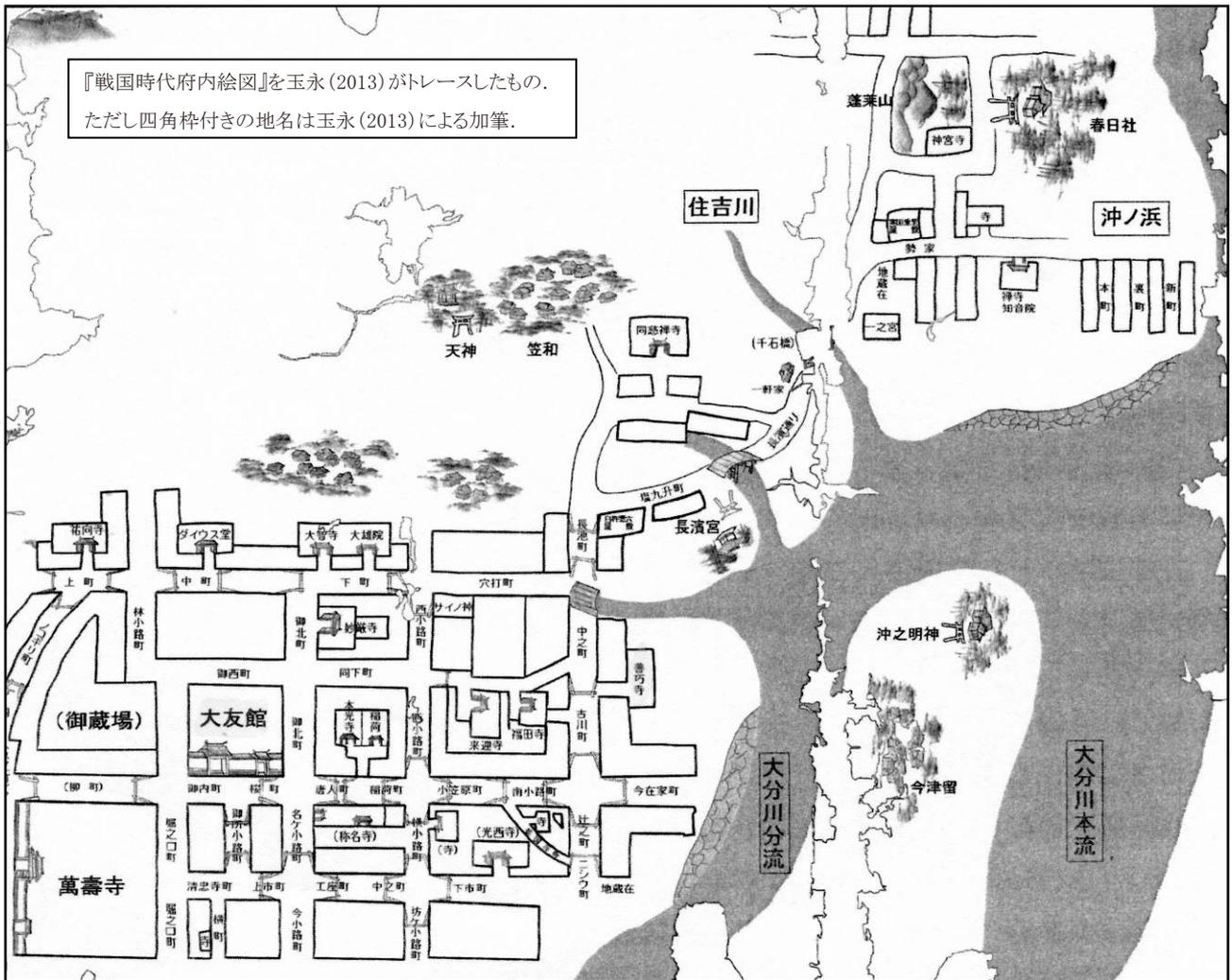


図4 『府内古図に描かれた豊後府内町』 [『戦国時代府内絵図』. 玉永(2013)から引用し注釈を加筆]

Fig.4. Old map of Bungo-Funai at the end of the 16th century  
[Explanatory notes are added to the map cited from Tamanaga (2013)]



図5 玉永(2013)による沖ノ浜の位置推定  
Fig.5. Estimated location of Okinohama  
after Tamanaga (2013)



図6 停泊中の南蛮船と船着場のイメージ(絵:安芸良)  
Fig.6. Image of nanban ship and wharf (Drawn by Aki)

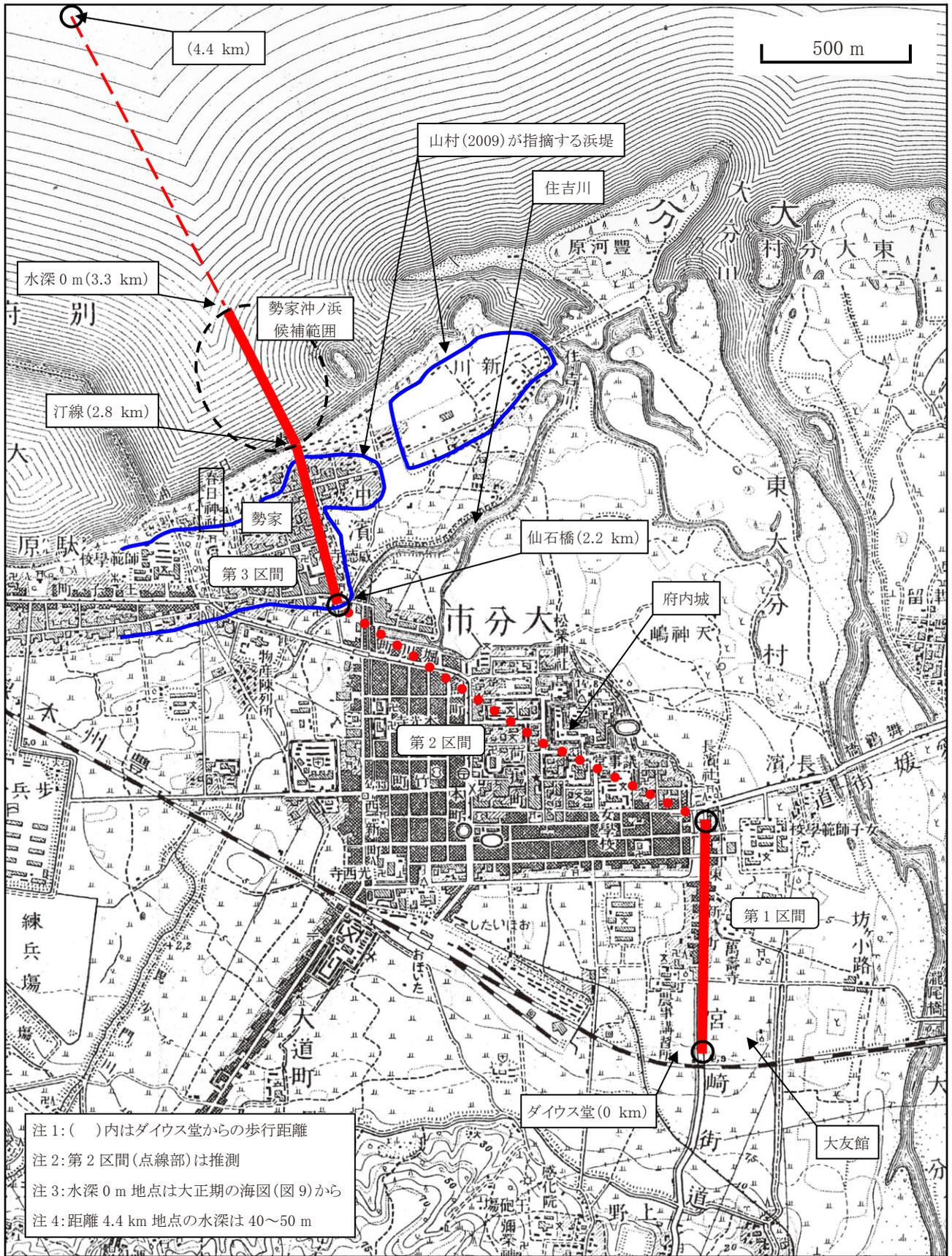


図 7 ダイウス堂から勢家沖ノ浜への経路と距離

[陸軍参謀本部陸地測量部 2万5千分の1地形図(大正三年測量)に加筆]

Fig.7. Route and distance from Daiusu-do to Seike-Okinohama [Explanatory notes are added to an old map with a scale of 1 : 25,000 surveyed by the Army Staff Headquarters in 1914]

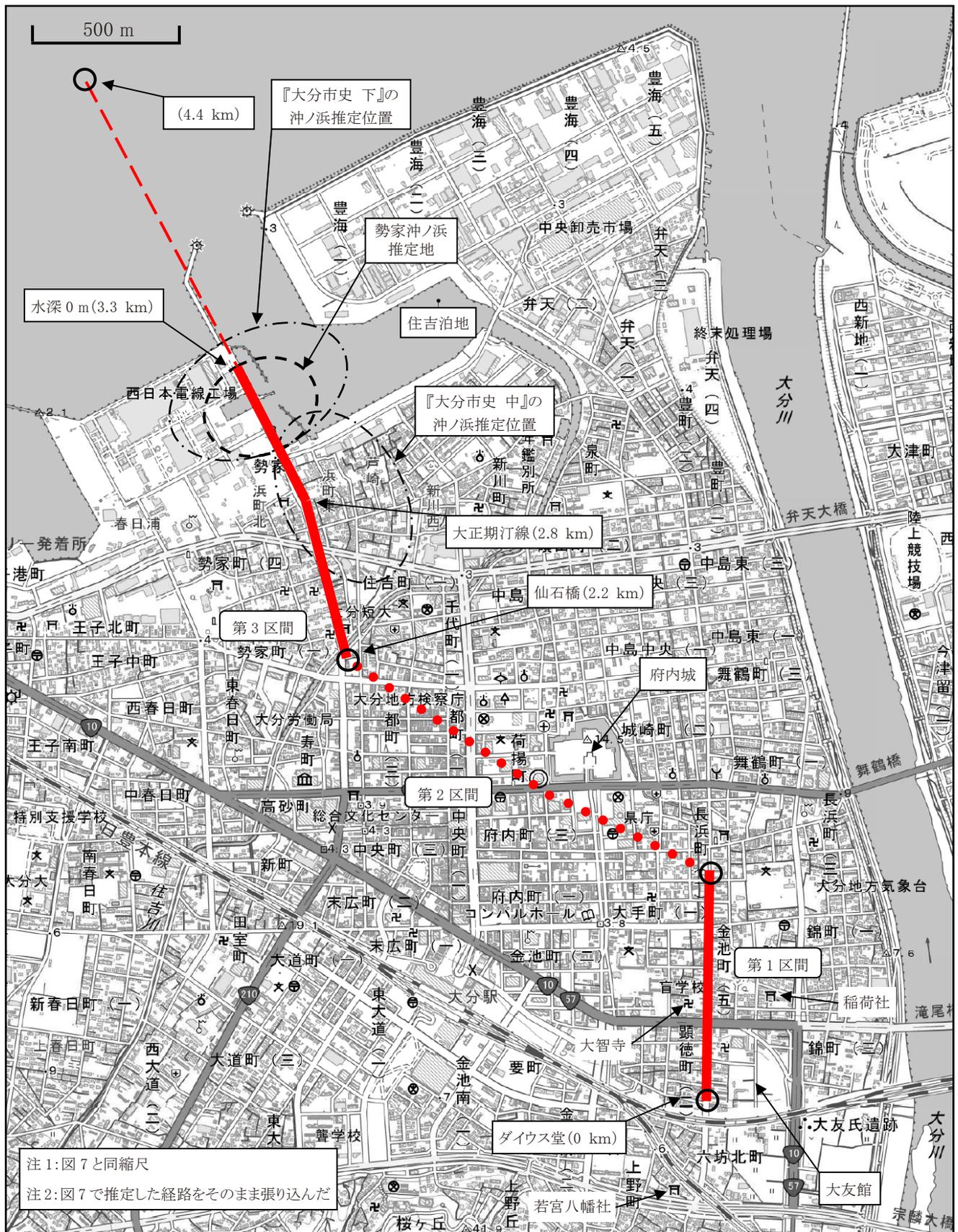


図8 ダイウス堂から勢家沖ノ浜への経路と距離  
[地理院地図に加筆]

Fig.8. Route and distance from Daiusu-do to Seike-Okinohama

[Explanatory notes are added to the current map issued by Geospatial Information Authority of Japan]

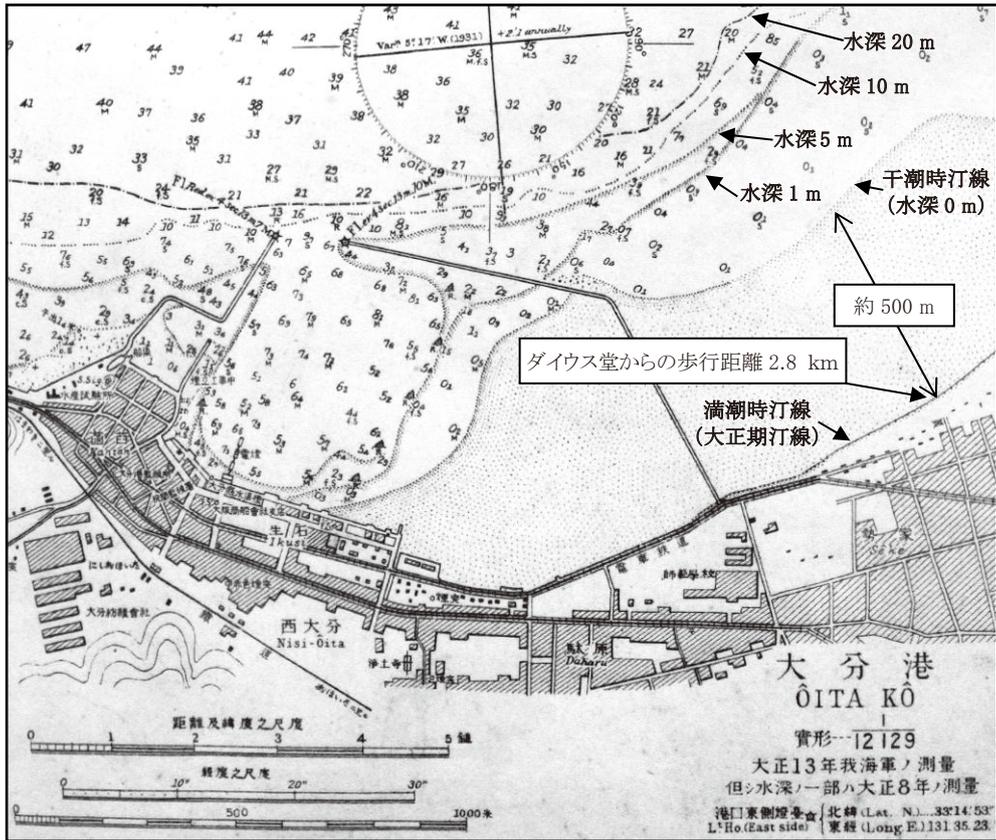


図9 大分港の水深と満潮時汀線から干潮時汀線(水深 0 m)までの距離  
 [別府湾諸港海図(大正十三年海軍測量. 第七管区海上保安部所蔵)に加筆]

Fig.9. Water depth of Oita port in 1924 and distance between a shoreline at high tide and one at low tide  
 [Explanatory notes are added to a marine chart of Beppu Bay made by Imperial Japanese Navy]

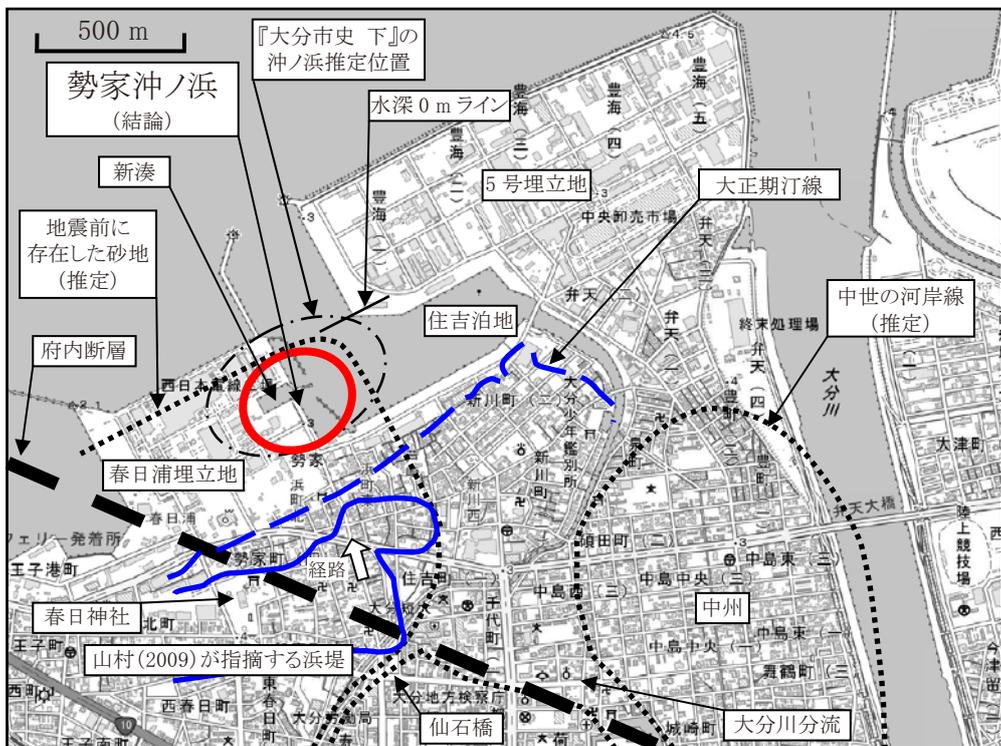


図10 勢家沖ノ浜の推定位置(本稿の結論) [地理院地図に加筆]

Fig.10. Estimated location of Seike-Okinohama (Conclusion of this paper)

[Explanatory notes are added to the current map issued by Geospatial Information Authority of Japan]